

## 特集

# 私の日蝕受入体験記

福澄孝博（当時：十島村歴史民俗資料館長／中之島天文台長兼務）、  
福澄孝博（現在：札幌市青少年科学館／北海道大学大学院工学研究院）

## 1. 十島村とは？

鹿児島県トカラ列島に属す十島村は、屋久島と奄美大島の間に広がる12の島々（5つは無人島：集団離島のあった1つを含む）よりなり、行政区は「鹿児島県鹿児島郡十島（としま）村」である。他の地域に無い3つの特徴を持つ。①南北162km（名古屋金沢間に相当）日本で一番長い村、②行政区域内に役場本庁がない（他は竹富町と三島村だが距離感が全く異なる）、③アメリカの統治下に置かれた地域の中で、唯一独自の振興法がない（本土復帰が早“過ぎ”た）。面積（有人7島）計93.17km<sup>2</sup>、人口計673人（H.17国勢調査）で、当時173人だった中之島でも、日食前には130人を割り込もうとしていた。宿泊施設は民宿のみで計25軒・定員合計315人、交通手段も週2便（または3便）の村営定期船「フェリーとしま」のみ、という状況だった。

## 2. 受け入れ準備

そんな小さな（人口・面積）村・大きな（お互いの距離・本庁との距離）村で『世紀の大日蝕』の受け入れ準備に携わった。

### 2.1 当初

#### (1) きっかけ、はじまり

日食ツアー参加や他の日蝕ファンとの交流、さらにライブ！ユニバース役員（顧問）としての活動を通し、私自身が実感を持って受入対策を考えるようになったまさにその時、村教育委員会が役場本庁での日蝕勉強会を設定した（2004年1月）。役場内にも「何か凄いことが起きるらしい」という機運が高まり、国を始めとして各方面への打診や村主催のカウントダウンイベントなどへと繋がった。

#### (2) 具体的検討

2005年4月、役場内に「2009年トカラ皆既日食対策会議」が設置され、3回の会議で明らかになった問題点を中心に2006年6～8月、村Webサイト上で受け入れ態勢アンケートを行った。結果は我々の心配が杞憂かの如く意外と好意的な反応で、いよいよ私にも村も具体的受入が見えてきた。しかし、である。国・県・外部団体等への支援要請への反応全くなし、村だけではできることに限りがある…。

### 2.2 方針転換

ここで村が開き直った！「我々は日食の主権者ではない！」大きな方針転換である。

現在の条件（能力）でできる範囲での受入とし、基本方針として、①住民生活を守る、②自然環境を守る、③インフラ整備は受益者負担で、の3本を掲げた。これには一般の方には思いも及ばない離島ならではの事情もある。例えばトイレ問題。島には処理施設はない。仮設トイレ設置だけではならず、「出たもの」をフェリーで本土へ運ぶ必要がある：バイオトイレ（水不要）で解決。経験豊富な業者（審査の上、近畿日本ツーリスト）と業務提携し全島で抽選による1500名の受け入れとした：結果として第3次募集は先着順。一方でロゴマークを公募で制定、住民への使用を呼びかけるなど、受け入れ側の啓発・盛り上げにも力を注いだ。

この転換を経て悪くなったのは人数制限の設定・滞在費用高額化、その一方で良くなったのはインフラ整備（アンケートでは「テント持参でも行きます」との意見もあった）・滞在期間の短縮：フェリーダイヤ見直しにより、である。[1]

## 2.3 広報、(子ども達への)啓発活動

もう一つ、力を入れたのが日食についての情報発信である。

### (1) 広報活動

何よりもまず考えたのは、日蝕をきっかけにトカラに来てもらいたい、知ってもらいたいだった。しかし、狭い島に大挙して渡ってこられても破綻するのも目に見えている。そこで「鹿児島県全体のこと」と捉えてポイントごとの特徴を発信し、分散化を図ることに注力した。北尾浩一氏(星の伝承研究室)と「ふるさと星事典」を出版し、日食ハンドブック的となるよう広く一般への発信に努めた。

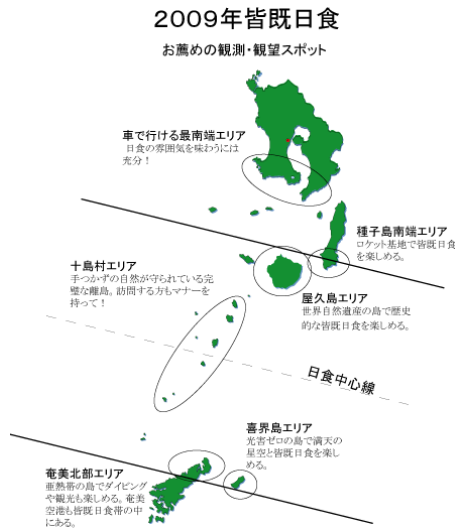


図1 当時使用した資料例。鹿児島県天文協会がパンフレットに載せたものを提供いただいていた。

### (2) 啓発活動

初期段階では観光のみに現地の関心が高まっていたが、「子ども達に貴重な学習の機会を」との趣旨に賛同、2009年薩南諸島皆既日食観測学習連絡会[2]に参加し、ワークシートや指導書の作成・配布に共にあたった。

一方、私個人で特に(島の)子ども達に強く伝えたのは「日食は雨が降っても日食」。普段の自然と比べられるからこそ、の種々の視点での変化に気づき、住んでいるからそれが

できる、を通して『島での生活への誇り』を持ってもらえることを第一に望み続けた。

## 3. まとめに代えて

来る2030年北海道金環日食では、集会の全体討論の中で紹介した鹿児島県中体連[3]のように、『我々の常識は一般の常識ではない』を今一度肝に銘じ対応いただきたい。発表では受け入れ準備に特化し、当日のこと・後日談には触れなかったが、私もこの自分の経験・体験を活かし、2030年の、いや、2030年に『向けて』の活動にあたっていきたい。

## 文 献

- [1] 結果としてツアー金額が高額となったのは否めないが、全て「必要な経費」である。例えば、当時「こんな額を取って食事はレトルトかよ」とあちこちで揶揄されたが、本土で調理した郷土色豊かな食事(初日の主菜は薩摩黒豚しゃぶしゃぶ、等)を『島に運ぶために』レトルト加工したもので、市販品のそれとは全く異なる。
- [2] 飯塚礼子(2010)「2009皆既日食での児童観測報告～寄せられた薩南諸島日食学習報告～」, 天文教育, 第22巻第6号(2010年11月号), 48.
- [3] 県大会当日が7月22日で、奄美の子らは頑張って大会に進出したばかりに皆既を見られなくなる。気付いた天文関係者が日程変更を提言したが、大会本部の回答は「県大会の日付はずっと以前から決まっていたものです」だった。日食とどちらが??



福澄 孝博